

日本語讀本 卷四

見本

森七九日部隊
文教班



1017-2

日本語教育振興會

日本語本讀本

四卷

東京外国語大学
図書館蔵書

673815

平成 23 年度



日本語教育振興會
藏書之印

もくろく

一	富士山	二
二	にぎのみこと	三
三	日本の四季	八
四	兔のさいばんくわん	十三
五	皇大神宮におまゐりして	十九
六	一つぶの米	二十二
七	春の雨	二十六
八	ビルマの産業	二十八
九	圓山應舉	三十三
十	つりばりのゆくへ	三十六
十一	ドバマ	五十四

十二	村祭	五十八
十三	神武天皇	六十
十四	或る日の部落	六十五
十五	乃木大將の少年時代	六十八
十六	母の日	七十二
十七	楠木正成	七十七
十八	日本の工業	八十二
十九	あへん戦争	八十四
二十	軍神加藤少將	八十九
二十一	秋	九十六
二十二	兵えいだより	九十八
二十三	シュエジゴンベヤ	百三

富士山



ごここから見ても、いつ見ても、

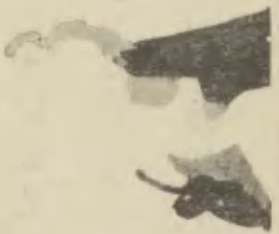
富士のお山は美しい。

白いあふぎをさかさまに、

かけた下からくもがわき、

すそ引くはての松原に

太平洋のなみが立つ。



やさしいやうで、ををしくて、

たふさいお山、神の山、

日本一のこの山を

世界の人があふぎ見る。

二 にぎのみこと

天照大神は、にぎのみことに、

「日本の國は、わが子わが孫、その子その孫の、次々にお治めになる國であります。みことよ、行ってお治めなさい。おだ

いじに。天皇の御位は、天地のつづくかぎり、いつまでもさかえませうぞ。」

とおつしやいました。さうして、御かがみに、御玉ご、御つるぎをおそへになって、みことにおわたしになりました。

「このかがみは、私のたましひご思って、だいじにおまつりなさい。」

とおつしやいました。にぎのみことは、つつしんでお受けになりました。

大ぜいの神様が、お供をなさることになりました。いよいよおたちになる時、先に出かけて行った者が、いそいでかへって

来て、

「道のごちゆうに、おそろしい男が、立ってをります。せいも高うございますが、はなが大へん高く、目は、かがみのやうでございます。その上、からだ中から光を出してゐます。」

ご申しました。

天照大神は、このことをお聞きになって、

「それは何者であらう。天のうずめ、たづねて來なさい。」
ごおいひつけになりました。

天のうずめのみことは、しっかりした、しかもおもしろいお方でありました。行ってごらんになると、なるほごおそろしさ

うな男です。うずめのみごとは、わざと、くすくすとおわらひになりました。するさ、そのおそろしい男がいひました。

「おまへはだれだ。どうして、そんなにわらふのか。」

「おそれ多くも、天照大神の御孫、にに

ぎのみごこのおさほりに

なる道を、ふさいで立つ

てゐるあなたこそ、だれ

です。」

さ、うずめのみごとは、



お問ひかへしになりました。

相手は、急にやうすをかへて、

「いや、私は、ににぎのみごことがおいでになるご聞いて、ここ

へおむかへに出てゐる者です。私が御あんないたします。

私の名は、さるたひごご

申します。」

さいひました。

うずめのみごとは、かへ

つてこのことを申しあげ

ました。



八
ににぎのみごは、天照大神に、おいごまごひをなきつて、
大空の雲をかき分けながら、勇ましくおくだりになりました。
さるたひこの神が、先に立って、御あんない申しあげました。
ににぎのみごは、ひうがのたかちほのみねにおくだりに
なりました。さうして、天照大神のおことばごほりに、日本の
國をお治めになりました。

三 日本の四季

日本の國は、山や川の美しい國です。ここに、春夏秋冬の四
季のうつりかはりのはっきりした國です。

冬の間、寒い風にふきさらされてゐ
た草や木は、春になると、緑の芽を出
して來ます。あたたかい風が吹いたり
かすみがたなびいたりする間に、草や
木は、すすすすこのびて行きます。

うめが咲き、ももが咲き、さくらが
咲き、色々の花が咲きそろふころにな
るご、たくさんの小鳥が、楽しさうに
さへづります。

「いいきこうになりましたね。」



道を行く人も、うれしさうにあいさつします。

花がちって、木の葉の緑がこくなる頃になると、のうかではかひこをかったり、麥を取入れたたり、田うゑをしたりして、いそがしい仕事がつづきます。

この田うゑの頃はちやうど「つゆ」で、毎日、毎日雨が降ります。この雨がやむと、急に暑くなって來ます。もうま夏です。ぎらぎらした日がのぼって、せみが暑さうに、ジージーと鳴きつづけます。夕方になると、ひるの暑さをわすれたやうに、涼しい風が吹いて來て、家中のものが、涼みだいに集って、色々なのしく話しあひます。

夏も終り、二百十日の頃になると、強い風が南の方から吹いて來ます。そしていねの花をちらし、春からくらうして作ったさくもつを、あらしてしまふこともあります。

いよいよ秋です。空は青くはれわたって、涼しい風が吹きはじめます。ききやう、なでしこ、をみなへしなごのかはいらし、い秋の花が咲きみだれます。夜は草むらで、松虫やすす虫が、美しいねを出します。

いねのほが出そろって、やがて金色の波がたんぼ一めんをおほふやうになります。そろそろいねかりが始まります。かきのみは赤くなり、みかんは黄色くなり、野山の木さいふ木は、美

しく色づきます。田や畠では、取入れにいそがしく、皆あせを流してはたらきます。

取入れがすむと、あちらの村こちらの村から、お祭のふえのねや、たいこの音が聞えて來ます。ぶじに取入れのすんだことを、神様におれいをするお祭りです。

もう、この頃、朝晩はだいぶん寒くなって來ます。赤や黄色に色づいた木の葉も、風が吹くたびに、落ちて行きます。



だんだん冬が近づいて來ます。たきぎをあつめたりして、寒い冬のしたくをします。美しく咲いてゐた菊も、すっかりかれてしまふと、寒い北風がみをきるやうに吹きたてます。

やがて、まっ白なゆきが降って來ます。子供たちは、つもったゆきの中を、元氣よく學校へかよひます。スキーやゆきがっせんをして、寒さにまけない體をつくります。

かうして、寒さと戦ひながら、楽しい春をまってるます。

四 兎のさいばんくわん

昔、あるいなかに、モンニャンとモンアといふ二人が住んで

のました。モンニヤンは牛を、モンアは馬をかってのました。ある夜のここ、モンニヤンの牛が子を生ましました。するご、ふしぎなここに、モンアの馬もその夜子を生んだのです。

前から、馬の子をほしがってゐたモンニヤンは、

「うまいことを考へたぞ。」

とひごりごを言ひながら、生まれたばかりの小牛と小馬ごを、そつご取りかへてしまひました。

あくる朝、モンニヤンは、

「牛が馬の子を生んだぞ。」

ときんじよの人々に、大聲で知らせました。

モンアはそれを聞いて、自分のうまやに行つて見ました。ところが、親馬のそばに、小牛がすやすやと眠つてゐるではありませんか。これは、モンニヤンのしわざにちがひないと思ひました。

モンニヤンの牛ごやには、大ぜいの人々が集つてゐました。そして、

「めづらしいことだ。めづらしいことだ。」
と言ひあつてゐます。

まもなく、モンアが來て、モンニヤンご口あらそひをはじめました。

「おまへがかへたにちがひない。」

「いやちがふ。わたくしはちつとも知らないことだ。」
 なかなかあらそひが終りません。

そこで、きんじよに住んでゐる兎の王に、さいばんしてもらふことになりました。

兎の王は考へてゐたが、やがて笑ひながら、

「今日から七日後に、ごちらが正しいかわかりますよ。それまでまつて下さい。」

と言って、かへって行きました。

七日目の朝、二人は村の人たちと一しよに兎の王の來るの

をまつてゐました。けれども、兎の王はなかなか來ません。ひるになつても來ません。皆まちくたびれてしまひました。

夕方になつて、西の空が赤くなつた頃、兎の王がやって來ました。

「どうしたのだ。やくそくがちがふではないか。」

と、人々は兎の王をせめました。兎の王は皆をなだめて、ゆっくり話しました。

「家を出たのは、朝早かつたのです。急いで來ると、砂はまが火事でやけてゐます。私は急いで、かごで水をはこんで、それをけしてしまひましたそれで、こんなにおくれてしまつ

たのです。」

ごまじめな顔で言ひました。

それを聞いた人々は、

「砂はまが、火事になるごいふことがあるかしら。かごで水をはこんだごいふごも、聞いたごがない。」

「それはうそだ、それはうそだ。」

ご、皆口をそろへて言ひました。

するご、兎の王は、

「まあ、私の話をお聞きなさい。この話は、あなた方が、私にさいばんをしてくれごたのんだ話ほごは、へんではありま

せんよ。私は今まで、馬が牛を生んだごいふごも、また、牛が馬を生んだごいふごも、聞いたごがありませんね。これは、全くあらしひにはなりません。牛のもちぬしは小牛を、馬のもちぬしは小馬をもつて行きなさい。それが私のさいばんです。」

ご言ひました。

五 皇大神宮におまゐりして

けき、元氣でうちやまだ市につきました。

まづ、外宮のおまゐりをすまして、それから、内宮へおまゐ

りしました。

うち橋を渡るご、青々としたしばふがつづいて、にはごりが遊んでゐました。いすず川のきれいな水で手をあらひ、口をすすぎました。すきごほった水の中に、たくさんの魚が、すいすいおよいでゐました。

道の兩がには、千年もたったかご思はれる大きなすぎの木が、立ちならんでゐました。さくさくご小じやりを



ふんで、しんぐん神殿の御門の前へすすみました。さうして、心をこめで拜みました。何ごもいへない気がしました。

神殿のおやねは、外宮ご同じやうにかやでふいてあります。むねには、大きなかつら木が並んで、兩はしに、ちぎが高くそびえてゐます。みんな白木づくりで、金色のかなぐが、さらきら光つてゐますが、そのほかには、何のかざりもありません。この御社の中に、日本の御祖先天照大神がおまつりしてあるのだご思ふご、まごごにありがたくて、しぜんご頭がさがりました。

かへりに、うち橋のそばのごりゐの前でしやしんをごりま

した。

今夜は、うちやまだ市にこまり、あすは、かしはら神宮へ向かつて待ちます。

またやうすをしらせますから、楽しみにしてまっけて下さ
い。

さやうなら

四月十日

兄から

正男君へ

六一つぶの米

二宮にのみやさんじらう金次郎の父は、金次郎が十四の時なくなりました。

金次郎は、母の手つだひをして、小さな弟たちのせわをしな
がら、よく家のためにはたらいたので、まづしいけれども、樂
しい日を送って行くことが出来ました。しかし間もなく、一人
の母親も死んでしまひました。

そこで、金次郎の兄弟は、別れ別れになって、よその家へあ
づけられました。金次郎は、をちさんの家で、せわになること
になりました。

をちさんの家に居て、晝は田や畠をたがやし、夜はおそくま
で、なはをなったり、わらちを作ったりしてはたらきました。

どんな悲しいことがあっても、つらいことがあっても、金次郎はよくしんぼうしました。

金次郎はまた、何かかして人なみの學問をしたいと思ひました。そこで、仕事のひまを見ては本をよみ、夜の仕事すすむとまた一心にべんきやうをしました。

しかし、をちさんは、

「百しやうには學問はいらない。あかりをつけるご油がいる。」
 といつて、そのべんきやうをゆるしてくれませんでした。

金次郎は、川ばたのあれ地をひらいて、なたねをまきました。あくる年の春になると、一めんに美しい花が咲いてなたねが

たくさん取れました。

金次郎は、油屋にたのんでそれを油にかへてもらひ、夜の仕事すすむと、その油をさもして本を讀みました。

ある年、大水が出たことがありました。金次郎は、水のためにあらされてしまった所をよくたがやし、すててあつたいねの苗をひろひ集めてそこにうゑつけました。秋になるとよくみのつて、一べうの米がございました。

「一つぶの米でも、次から次へに育てて行けば、たくさんの米になる。同じ土地でも、よく手入れをすれば、りっぱな田が出来る。なまけるご、草がはへて、土地があらしてしまふ。」

と考へて、金次郎は、それから一そうせいを出してはたらきま
した。

かうして、よくはたらき、よくべんきやうした金次郎は、後
には、りっぱな學者になり、あれた村をおこし、國を富ますた
めに、大きなてがらを立てました。

七 春の雨

明かるい色のわか草に、
しとしと、細い雨がふる
雨はこぬかか、糸のやう。



ここは川ばた、やなぎのめ、
ぬれて、しづくが落ちるたび
ひろがる波のわがまるい。
春は春でも、まだはじめ、
村から町へゆるやかに
すこしにごつて行く水よ。
たまごのからをうかべたり、
わらのきれはしうかべたり
えびやめだかも、およがせて。



八 ビルマの産業

米

世界で、最も多く米のされるところは、亞細亞洲である。北は滿洲國から、西はインドまで、どこへ行っても青々とした稻田を見るここが出来る。

その中でも、ここに多くされるのは、支那、インド、日本、ビルマ、フツイン、タイなどであるが、米を輸出する^{ウシツツ}この出来るのは、ビルマ、フツイン、タイなどの國々である。

ビルマでは、一年間におよそ六百萬トンの米がされる。その中三百五十萬トンを、米の不足な共榮圈^{キョウエイケン}の國々に輸出してゐる。それ故ビルマは共榮圈の米倉であると言つても、さしつかへない。

ビルマでは、米を一年に一回作るのがふつうである。しかし作り方をけんきうし、田に水をひくせつびをよくすれば、よい米がもつと多くされるやうになるであらう。

よい米を多く作つて、國をゆたかにしたいものである。

チーク

チークは、ビルマ、インド、タイなどからとれる世界でも名高いざいもくである。ここにビルマのチークは、質のよいので世界第一といはれてゐる。

テナセリムの山々や、シャンの高地に行くとき、大きな葉を、空一はいにひろげたチークの美しい林がある。

—ビルマはチークのこきやうである。—
 といふ言葉があるが、まったくその通りである。

この美しい林からきり出されたチークは、港にはこばれて外國に輸出される。一年間の輸出高は、戦前、およそ三千萬ルピーであつた。

このやうに、大切な木であるので、むやみにチークの木をきらないやうに、またチークの木がふえるやうにつとめなければならぬ。

天にこごくやうな大木は、十年や二十年で出来るものではない。小ゆびのやうな小さい木が、雨にうたれ、風にふかれて大きくなつたのである。—
 それを思ふと、私たちは、木を大切にせねばならない。

綿

われわれの衣類は、おもに綿、絹、羊毛、麻などでおられて

ある。

その中、もめんが最も多く用ひられてゐる。もめんは、色々のおりものの中、一番丈夫であり、ねだんも安いからである。

ビルマで綿の多くとれるところは、雨の少いサガイン、ミンチャン、メイクチーラ、モニワなどの縣である。しかし外國にくらべて、とれる高も少く、質もあまりよくはない。

ビルマには、綿を作るのによい土地が、まだまだ多く残つてゐる。これから作り方をよくけんきうし、りっぱな綿を多くつくつて、米と同じやうに、共榮圏の國々におくり出したいものである。

九 圓山應舉 まるやまおうきよ

應舉は、京都のぎをんの社に出かけて行って、毎日、にはごりの遊んでゐるやうすを見てゐました。じっこ、にはごりばかりみつめてゐるので人はふしぎに思ひました。

一年ばかりたつてから、應舉は、にはごりの繪をかいて、社にをさめました。

お、参りに来た人たちは、

「よくかけてゐる。」

「まるで生きてゐるやうだ。」

「ごいって、ほめました。」

ある日、やさいを賣って歩くおちいさんが通りかかって、しばらく見てゐました。

「にはごりはいいが草があるのはをかしい。」
ごおちいさんは、ひごりごをいひました。

應舉は、そのことを聞いて、おちいさんの家へたづねて行きました。おちいさんは、

「私など、繪のごごは少しもわかりませんが、ただ、長い間、にはごりをかかってゐますので羽の色つやが、きせつによつてちがふごご



を、ぞんじてをります。あの

にはごりの羽は、冬のやうですが、そばに夏の草がおきそへてあるので、ふしぎに思ったのでございます。しつれいなごごを申しまして、まごごにすみませんでした。」

ごいひました。

應舉は、

「よいごごを教へてくださった。」



ご、ていねいにおれいをいってかへりました。

應舉は、そののち、またにはごりの繪をかいて、あのおちいさんに見せました。おちいさんはすっかり感心しました。それよりも、自分のやうな者にでもよく聞いて、繪をかかうとする應舉を、ほんたうにりつばな人だと思ひました。

應舉は、日本でも名高いぐわかの一人です。

十つりばりのゆくへ

ほぞりのみこと「にいさん、お願いがあります。」

ほぞりのみこと「何だ。」

ほぞりのみこと「にいさんは、毎日海へ出て、魚を取ってゐらっしゃる。私は、毎日山へ行って、鳥やけものを取ってゐますね。」

ほぞりのみこと「さうだ。」

ほぞりのみこと「そこで、お願いがあるのですがね。」

ほぞりのみこと「ごういふことだ。」

ほぞりのみこと「今日一日だけ、私に海へ行かせてくださいませんか。にいさんは、山へいらっしゃって。」

ほぞりのみこと「そんなことはいやだよ。」

ほをりのみこと「たった、一日だけでいいのです。」

ほでりのみこと「いくら一日でも、いやだ。」

ほをりのみこと「さうおっしゃらないで、今日だけ、私につりをさせ

てください。」

ほでりのみこと「そんなに、つりがしたいのか。」

ほをりのみこと「さうです。私も一度、あの大きな

たひをつつてみた

いのです。」

ほでりのみこと「では、つりをして

みるがいいさ。し



かたがない。わたしは山へ行かう。」

ほをりのみこと「ほんたうですか。」

ほでりのみこと「ほんたうだ。このつり竿をもって行け。」

ほをりのみこと「ありがたうございます。にいさんは、この弓と矢を

持って、山へいらっしゃい。」

一一

ほをりのみこと「ごうして、つれないのだらう、朝から一匹もつれな

い。

その時、魚が糸を引く。

おや、引く、引く。ぐいぐい、引くぞ。しめた、大き

な魚だ。引きあげてやらう。よいしょ。

ほをりのみことが、つり竿をお引きあげになる。糸がぶつりとぎれて、魚が逃げる。

しまった。大きいのを逃した。

さんねんさうに、つり糸をいぢつていらつしやつたが、ふと、つりばりのなりのに気がついて、

つりばりが無い。ごうしよう、こまったな。ああ、しかたがない。にいさんにあやまらう。にいさんはおこりになるだらうな」

三

ほでりのみこと「山へ行っても、小鳥一羽取れなかった。おもしろく

もない。さ、弓矢を返すよ。」

ほをりのみこと「まことにすみません。」

ほでりのみこと「何かつれたか。」

ほをりのみこと「ちっさもつれなかつたんです。つれないどころか、

申しわけのないことをしてしまひました。」

ほでりのみこと「ごうしたのだ。」

ほをりのみこと「つりばりを、魚に取られてしまひました。」

ほでりのみこと「取られたつて。」

ほをりのみこと「さうです。」

ほでりのみこと「――」

ほをりのみこと「どんなことでもして、おわびいたします。」

ほでりのみこと「おまへからいひ出しておいて、だいじなつりばりをなくしてしまふなんて、あんまりだ。」

ほをりのみこと「ほんたうに、申しわけがありません。どうぞ、おゆるしてください。」

ほでりのみこと「いや、ゆるすことはできない。」

四

ほをりのみことは、海べで泣いていらつしやる。そこへ一人の年とつた神様がおいでになる。

神

様「もしもし、あなたは、どうしてそんなに泣いていらつしやるのですか。」

ほをりのみこと「にいきんのだいじなつりばりを、魚に取られてこまっております。」

神

様「それはお氣のどくな。私が、いいことを教へてあげませう。そこに、舟があるでせう、あれにすぐおのりなさい。私とその舟をおしてあげますから、しばらく目をつぶっていらつしやい。するご間もなく、きれいなごてんへおつきになるでせう。」

ほをりのみこと「きれいなごてん。何のごてんですか。」

神
 様「海の神様のごてんです。そのごてんの門のそばに、
 井戸があつて、井戸のそばには、大きな木が立って
 めます。あなたは、その大きな木にのぼつて、まっ
 ていらつしやい。」

ほそりのみこと「さうするぞ。」

神
 様「海の神様が、きつこいいことを教へてくださるでせ
 う。さあ、舟におのりなさい。おしてあげますから。」

五

海のごてんの門の前に、大きな木が立つてゐる。ほそりのみ
 ことは、木を見あげながら、



ほそりのみこと「ははあ、この木のこごだな。のぼつてゐよう。」

木にのぼつて、下をどらんになる。

あ、井戸がある。きれいな水だな。」
 女が出て来る。井戸の水をくまうとして、

女 「まあ、りっぱな神様が、水にうつつてゐらっしゃる。」

木の上を見あげて、女は、うやうやしくおじぎをする。

ほそりのみこと「水を一ぱいください。」

女 「かしこまりました。」

女は、井戸から水をくんで、ほそりのみことにさしあげる。ほ

そりのみことは、ぐつとおのみになつて、

ほそりのみこと「ああ、うまい水だ。ごちそうさま。」

六

正めんじ、海の神様がこしをかけていらつしやる。そこへ女が出て来る。

女 「海の神様。」

海の神様「何だ。」

女 「門の前の木に、りっぱな神様がいらつしやいます。」

海の神様「りっぱな神様が。」

女 「さやうでございます。」

海の神様「それは、きつと、日の神のお子様にながひない。お

むかへしませう。」

海の神様が、ほそりのみことをおつれ申して出てくる。

海の神様「どうぞこちらへ。」

ほそりのみことはこしをおかけになる。

よくおいでくださいました。何か御用でございませうか。」

ほろりのみこと「じつは、海でつりをしてゐたら、つりばりがなくなつてしまひました。」

海の神様「つりばりが。」

ほろりのみこと「さうです。それは、兄のだいじなつりばりで、私もこまつてしまひました。するご、年ごつた神様が私に、海のごてんへ行くやうに教へてくれました。それで今ここへやつて來たのです。」

海の神様「それは、ほんたうにおこまりでございませう。さつ

そく、さがさせてみませう。

女に向かつて、

魚たちを、みんなここへよび集めるやうに。」

女 「はい。」

女は魚たちをたくさんよんで來る。

よんでまゐりました。」

海の神様「これでみんなか。」

女 「はい、たひだけは病氣で、ねてゐますので、ここへまゐつてゐません。」

海の神様「さうか、みんなの者にたづねるが、だれか日の神の

お子様のつりばりを、取って行ったものはないか。」
魚たち「ぞんじません。」

海の神様「いや、たしかにあるはずだ。だれか知ってるものは
はないか。」

魚たち「少しもぞんじません。」

海の神様「をかしいな。」

海の神様は、しばらくお考へになつて、女に、

では、たひをちよつとよんで来てくれないか。」

女「はい。」

女は、たひをつれて出て来る。

たひ「何か御用でございませうか。」

海の神様「おまへは、日の神のお子様のつりばりを知ってるな
いか。」

いか。」

たひ「じつは、この間、つりばり

をのぞにかけまして、た

いへんくるしんでゐる

ところでございます。」

海の神様「あ、それだ。」

女に向かつて、

たひののぞから、そのつ



りばりを取ってやれ。」

女

「はい。」

つりばりを取る。

た

ひ「あ、これで、すっかりらくになりました。」

女はつりばりを水であらつて、海の神様にさしあげる。

海の神様「なるほど、つりばりだ。」

海の神様は、ほそりのみことの前にひざまづいて、

海の神様「このつりばりでございますか。」

ほそりのみこと「あ、これだ。たしかにこれです。」

ほそりのみことは、思はずにつこりなざる。

海の神様「見つかつて、ほんたうによろしうございました。」

だいじな、だいじなつりばりが、

出て来て神様およろこび。

いたい、いたいと泣いてゐた、

たひもよろこびおめでたい。

めでた、めでたささかなたち、

みんなまふやら歌ふやら。

十一 ドバマ

私たちは、おいはひや、色々な集りの時に、

「ドバマ、」

「ドバマ、」

と、聲高くさけびます。「ドバマ」といふ言葉は、ほんたうに私
たちを元氣づけてくれます。

私たちが「ドバマ」と手をあげてさけぶ時、

「ビルマよ、一つになれ。私たちはみんな力を合はせて、りっ
ばな國をつくりあげようではないか。」

といふ決心をあらはしてゐるのです。

國內の争ひは、

ごこの國にもあり

ます。ビルマでも

昔、色々なしゅぞ

くが、たがひに争っ

たところがありまし

た。しかし、長い

年月の間に、言葉も生活もだんだん似かよって来て、今では、
あまり大きなちがひのないしゅぞくになってしまひました。



ビルマの人口は、わづかに千六百万人です。こんなに人口の少ないビルマが、国内でまた小さくわかれてしまへば、たうてい獨立して行くことが出来ません。

国内を小さくわかれさせるのは、英國がしよくみんなを治めるずるい仕方です。私たちは、この英國人の考へ方にだまされてはなりません。

大國民となるためには、しゅぞくの間の少しのちがひを考へないで、ちやうど、小さな川が集つて大きな川になるやうに、おたがひにこけ合つて行かねばなりません。

全ビルマは、「ドバマ」の聲に立ちあがりました。

「ビルマよ、一つになれ。ビルマよ、一つになれ。」

こ、さけびながらすべての人が今、戦つてゐます。

ビルマがさかんになり、りつばになつて行くには、ごうしても今度の戦争に勝たねばなりません。物が不自由になつたり、物のねだんが高くなつたりしても、私たちは不平を言はずに、ごんな苦しみにもたへていかねばなりません。

「ドバマ」 「ドバマ」

私たちは心を一つにして、きつここの大東亞戦争に勝ちぬかうではありませんか。

十二村祭

村のちんじゅの神さまの、

今日はめでたいお祭日。

ごんごんひやらら、

ごんひやらら、

朝から聞える笛たいこ。

今年もほう年まん作で、

村はそうでの大祭。

ごんごんひやらら、

ごんひやらら、

夜までにぎはふ宮の森。

治まる御代に神様の、

めぐみたたへる村祭。

ごんごんひやらら、

ごんひやらら、

聞いても心がいさみたつ。



十三 神武天皇じんむてんのう

ににぎのみことから御三代ののち、日本をお治めになった方を、神武天皇と申しあげます。

天皇は、はじめ、ひうがのたかちほの宮から、國を治めてをられました。しかしそのころ、遠い東の方に、まだ天皇のおめぐみを知らない悪ものごもが居て、人々を苦しめておりました。天皇は、

「東の方には、國を治めるにつがふのよいところがあるといふ。みやこをそこにうつして、悪ものごもをしづめ、天照大神のみ心を、國中にひろめよう。」

とおほせられて、軍隊をひきゐて、ひうがをおたちになりました。

天皇は、みちみち、悪ものごもをお平げになり、ながい年月をかさねて瀬戸内海せとないかいを舟で進んで行かれました。

かうして、なには(今の大阪)におつきになると、すぐに悪ものごもの居るやまごに向かはせられました。しかし敵のいきほひが強くて、やまごにおはいりになることが出来ません。そこで南のくまの方からおせめになることになりました。ここからやまごにおはいりになる道は、山がけはしくて、大そう御

苦心をなさいました。

ぞくの大將ながすね

ひこは、ここをさいご

ご防いだので、またま

た、はげしい戦になり

ました。

この時、ごここからごもなく、金色のさび

がごんで来て、お立ちになつてゐる天皇の

御弓のさきにごまりました。金色の光は、

きらきらごかがやいて、ぞく兵の目はくら

むほごでした。天皇の御軍は、ここごごばかりせめたので、

ぞくはさんさんにやぶられてしまひました。

かうして、やまごはすっかりをさまりました。人民は生きか

へつたやうに元氣で、田や畠ではたらいて居ます。

そこで天皇は、うねび山のふもごのか

しはらに、みやこをおさだめになり、こ

のみやこを中心にして、天照大神の御心

をひろめようごなさいました。

さうして、

「あめの下をおほひていへごせむ。」



ごおほせになりました。この御言葉は、

「この世の中を、一家のやうな楽しい、平和なところにしよう。」といふいみであります。

天皇は、このかしはらの宮で、御位につかれる式を行はれて第一代の天皇におなりになりました。

この年が、日本の紀元元年きげんねんで、今から二千六百年あまり前になります。さうしてその日がちやうど、二月十一日にあたりますので、日本では、この日を紀元節きげんねつといつて、さかんなおいはひをいたします。

十四 或る日の部落

日本の或る部隊が、サルウィン河にそつて、北に進んでいった時のことである。

バアンに近い村のお寺が、この部隊のしやうびやうしやを入れるところになった。しかし、この寺はあまり大きくなかつたので、ゆか下まで使はなければならなかつた。その上、この部隊はバアンをせめるためにたいへん急いで來たので、食物のよういも十分でなかつた。

この日本軍のやうすを知つた村の人たちは、近くの村々をか

けまはつて、にはこり、ぶた肉、たまご、トマトなどをたくさん集めて来てくれた。ドリアンやバナナなどを持ってみまひに来る子供もあつた。

日がたつにつれて、病人がだんだんふえて来て、家がせまくなるばかりである。

「何ぞかならないものだらうか。」

部隊長をはじめ、皆しんばいをしてゐた。

或る日の夜明けがたである。お寺のかねが、急にガーンガーンとなり出した。しばらくするご村の人たちが、山刀やをのを持って集つて来た。兵隊たちは、

「ごうもへんだな。」

ご思ひながらやうすを見てゐるご、お寺の坊さんが出て来て、何か話をしてゐる。話が終るご村の人たちは一度にちつて、山にはいつて行つた。

やがて、竹ややしの葉がたくさんはこばれて来た。さうしてみるみる中に病人を入れる小屋が出来あがつた。この小屋は晝の暑さをさけるにも、夜の寒さを防ぐにも、たいへんつがふよく出来てゐた。

「これはぐあひがよい。」

兵隊たちは大よろこびである。

かうして小屋は次第にたてまされて、大きな病院になつて
 った。

部隊長をはじめ、兵隊たちはこの村の人たちのあたたかい心
 を、ほんたうにありがたく思った。さうして、

「このビルマ人たちのために。」

と、皆かたい決心をしたのであつた。

十五 乃木大將の少年時代

乃木大將は小さい時、からだがよわく、その上、おくびやう
 でした。そのころの名を無人なきこといひましたが、寒いといつては

泣き、暑いといつては泣き、朝晩よく泣いたので、近所の人
 大將のこゝを、無人ではない泣人なきこだぞ、いったこいふこゝであ
 ります。

父は長府ちやうふの武士で、江戸(今の東京)にすんでゐましたが、自
 分の子供がかうよわむしではこまる、ごうかして子供のから
 だを丈夫にし、氣を強くしなければならぬと思ひました。

そこで、大將が四五さいの時から、父は、うすくらいうちに
 起して、行きかへり一里もある高輪たかなわの泉岳寺せんがくじへよくつれて行
 きました。泉岳寺には名高い四十七士のはかがあります。父
 はみちみち四十七士の話をして聞かせながら、そのはかにお

参りしました。

ある年の冬、大將が思はず「寒い」さひひました。父は、

「よし、寒いならあたたかくなるやうにしてやる。」

さといって、大將を井戸ばたへつれて行き、着物をぬがして、頭からつめたい水をあびせかけました。

大將は、それから後、一生の間「寒い」さひ「暑い」さひも、けつして言はなかつたさひふここでありませう。

母もまた、えらい人でありました。



大將が、何かたべ物の中にきらひなものがあるさ、三度三度の食事に、そのきらひなものばかり出して、好きになれるまで、家中の者がそれをたべるやうに七ました。それでたべ物に好ききらひが、全くないやうになりました。

大將が十さいの時、家中皆長府へかへるさになりしました。その時、江戸から大阪まで、馬にもかごにもものらず、長いみちを父母さいっしよに歩いて行きました。そのころ、からだか、もうこれだけ丈夫になつてあたのです。

長府の家は、二間かたましかない小さいそまつな家でした。けれども、刀、槍なご、武士のたましひさいはれる物は、いつもき

らきら光つてゐました。

大將が、しつそで忠義な人として、武人の手本とあふがれるやうになつたのは、この父母の教へによるごいはれてゐます。

十六 母の日

朝、目がさめたのは五時すぎであつた。まだ外はくらかつた。姉さんも起きるころであつた。姉さんが、

「靜かにお仕事をしませうね。一郎さんはもう少したつてから起しませう。」

ごいったので、私は音のしないやうに起きて、着物を着かへた。

姉さんは、すぐ御飯をたきはじめた。私は飯だいをふいたり、おちやわんやおはしをならべたりした。

それから一郎さんを起しに行くご、

「眠いな。」

ご大きな聲をだした。

「一郎さん、昨日のおやくそくよ。さ、靜かに起きませうね。」
ごいふご、

「ああ、さうだった。」

ごいひながら、目をこすつて起きた。水で顔をあらつてから、
「ぼくは、庭をはくのでしたね。」

ご、ほうきを持って出て行った。

「ずるぶん寒いな。」

そんなことをいって、庭をはきはじめた。

みんながいっしょにはたらいたので、朝のしたくはすぐ出来あがった。

「もうちき六時ね。今日はお祝ひの日ですから、花をかざりませう。」

ご姉さんがいった。私が庭のつばきの花を折って来るご、姉さんが、

「きれいなつばきね。お母さんのお好きな花だから、ちやうご

いいでせう。」

さといって、花びんにさした。

そこへお母さんが起きていらつしやって、みんなの起きてゐるのをごらんになって、びっくりなさった。

「まあ、けさはどうしたのです、こんなに早く起きて。それに朝御飯のしたくもちゃんご出来て。」



一郎さんが、

「今日は「母の日」ですから、お母さんのおてつだひをしたのです。」

さいったので、お母さんもやつとおわかりになった。

御飯の時、お母さんがお父さんに、

「けさは、子供たちが早く起きて、朝御飯のしたくから、お庭のさうちまで、私の知らないうちに、してくれたのですよ。」
とおっしゃるご、お父さんは、

「それはえらい。感心なことだ。」

とおほめになった。

十七 楠木正成

南方から日本へ行く船は、繪のやうに美しい瀬戸内海を通過して、神戸の港に入る。この神戸には、楠木正成をまつた湊川神社がある。

日本人は、だれも、楠木正成の立派な忠義の心をわすれる者はない。さうして、雨の日も風の日も、湊川神社にお参りする人がたえたことがない。

今から六百年ほど前、後醍醐天皇が國を治めてをられたところのここである。足利尊氏といふ悪い大將がゐて、天皇にそむ

きたてまつり、兵をひきゐて京都にせめのぼつて来た。

楠木正成は、天皇の命をうけて、これを京都の近くでむかへ、一度はこれをうちやぶつたが、ぞくは間もなく勢をくわいふくして、又京都に兵をすすめて来た。

正成はぞくをうつたために京都をたつて兵庫ひやうごに向かった。

その時、子の正行まさつらは、父と共に戦争に行きたいと、後を追つて来た。しかし、こんごの敵は大軍である。正成は、生きてかへれないと、かくごをして居た。それで青葉の美しいさくらゐのえきで、正行をそば近くよびよせ、天皇からいただいたきくする菊水の刀をあたへながら、



「こんごの戦は、たうてい勝つことが出来ないと思ふ。父が戦死したのち、母のをしへをよくまもり、大きくなったならば、父の志をついで、天皇に忠義をつくしたてまつり、ぞくをほろぼさねばならぬ。それが何よりの孝行であるぞ。おまへも十一さいになつたのだから、父のいふことがよくわかるだらう。」

ごをしへて家にかへらせた。

兵庫についた正成は、湊川にちんをさり、ぞくさはげしい戦をし

た。しかし、敵は大軍である。正成のけらいは、つぎつぎに戦死していった。正成も十一かしのきずを、身にうけてしまった。

「もう、これまでである。」

と、正成は近くにあった人家にはいつて敵をさけ、弟の正季まさきに向かつてたづねた。

「さいごになって、何かねがふことはないか。」

「七たび人間に生まれかはって来て天皇の敵をほろぼしたいものです。」

正季はかう答へて、兄の顔をちつと見つめた。正成はそれを聞くご、

「自分もさう思つてゐる。」

と、まんぞくさうに、にっこりご笑つた。二人は刀でさしあつて死んだ。その時、正成は四十三さいであつた。

正行は、父のをしへをよくまもり、成長した後、いくごもぞくをやぶつて、大きなてがらをたてたが、二十三さいの時、四條しやう殿なほで、はなばなしくぞくご戦つて死んだ。

正成はじめその一族ぞくの忠義なおこなひは、長いのちまで日本人の心をふるひたたせてきた。そして國になんぎなごごがおこると、ぞくぞくと正成のやうな人が出てきて、天皇に忠

義をはげんでゐる。

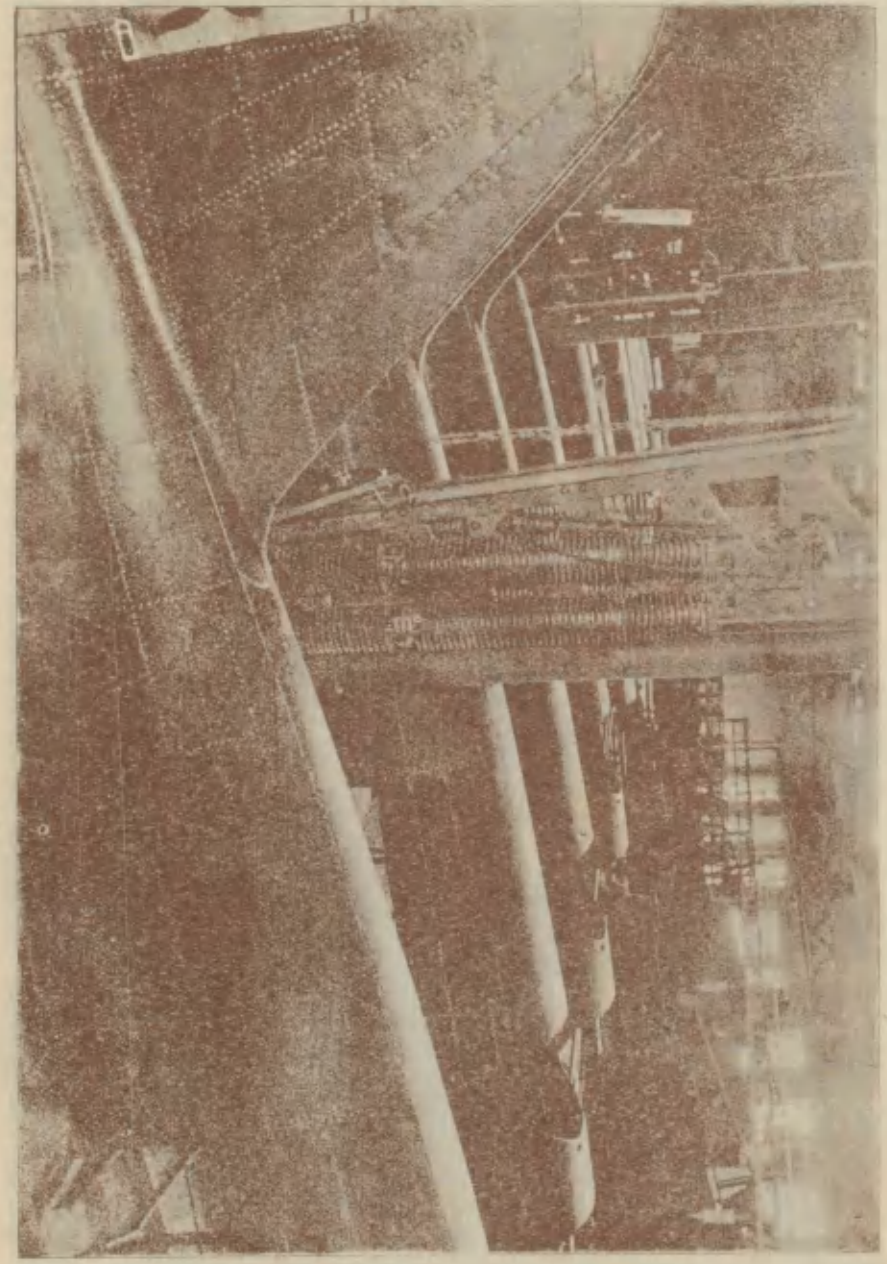
十八 日本の工業

日本は世界でも指をりの工業國である。

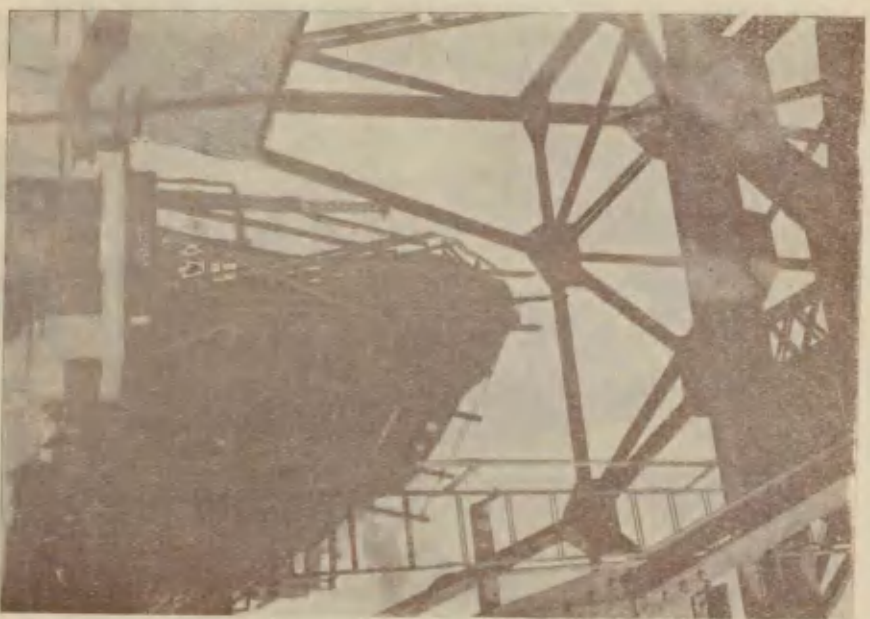
それは人口が多く、學問がゆきわたつてゐる上に、大工業に
なくてはならない電氣や石炭などが、國のうちに多くあるた
めである。

東京、大阪、名古屋などのまはり、九州の北の方などは、も
つとも工業のさかんな所である。

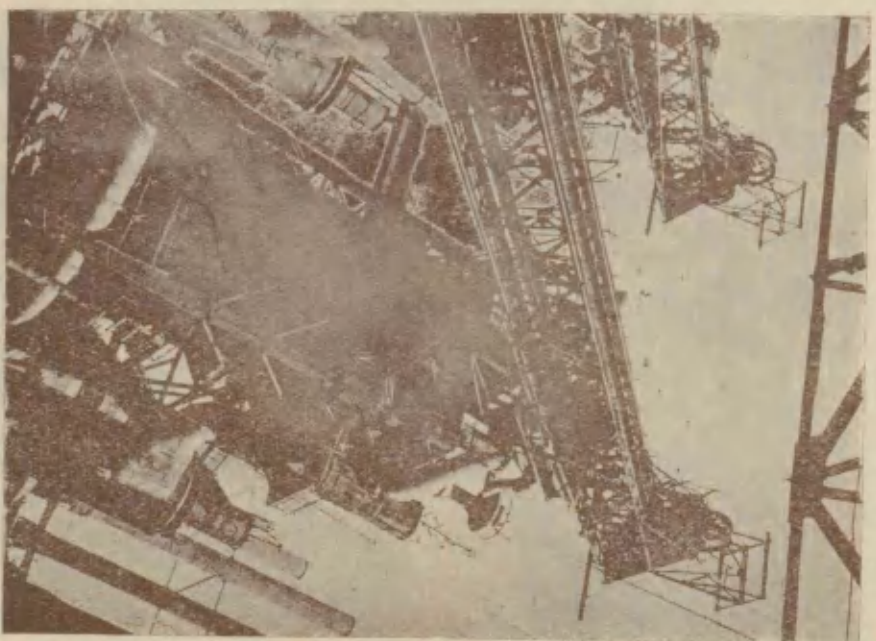
日本の工業の中で一番さかんなものは、重工業である。軍艦



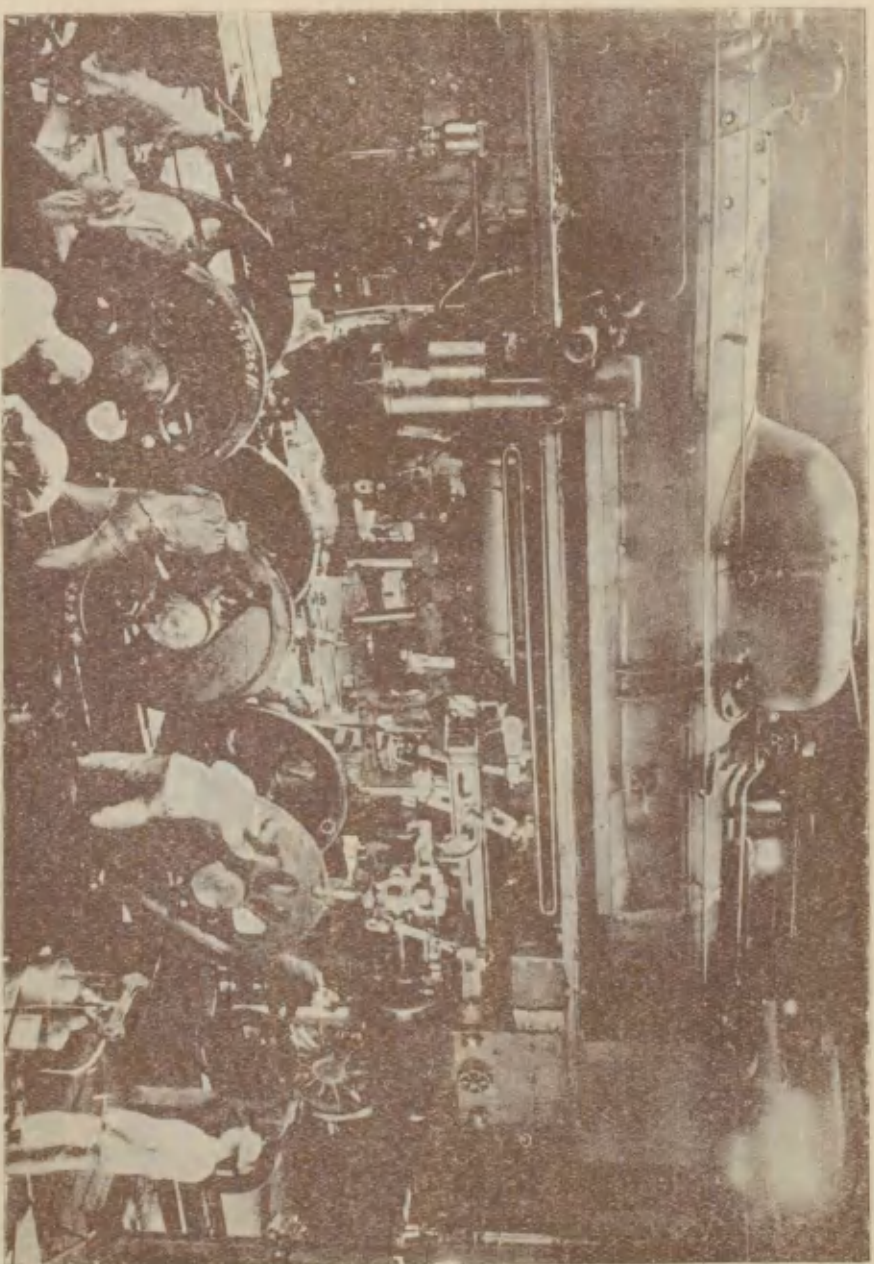
機 行 機



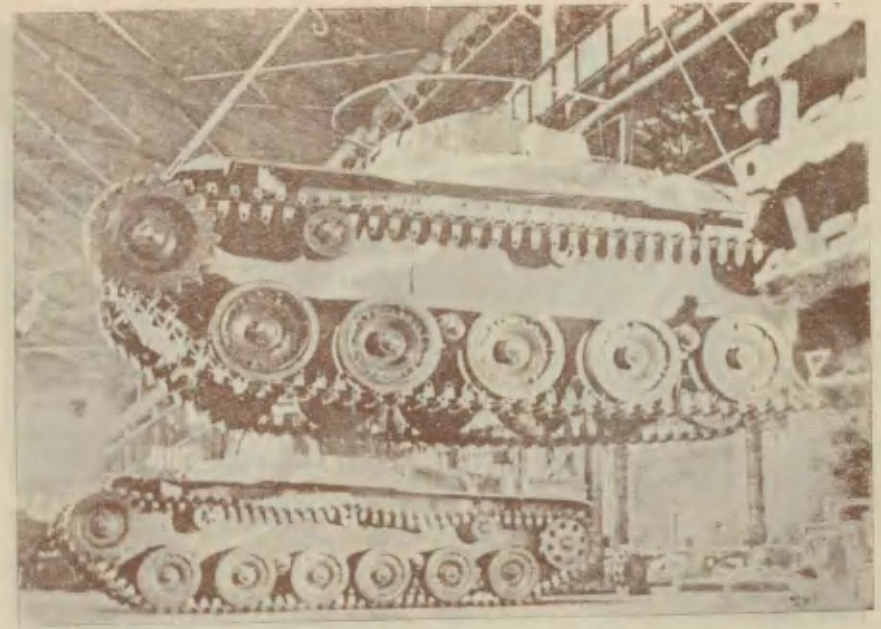
船 架



製 鋼



機 車 工 人



戦車



ばうせき

や汽船、汽車、飛行機、戦車、大砲などを作る大工場が國中いたる所にたてられ、大東亞戦争に勝ちぬくために一日中、さかんな煙をはいてゐる。

その外、ばうせき、おりもの、機械、薬品、ひりやう、食糧などを作る工業も世界のごこの國にも劣らずさかんである。日本の工業製品は戦前、世界のすみずみに輸出されてゐた。

日本も、四十年前ごろまでは、機械や薬品など、外國から買はねばならないものが少くなかつた。

しかし、國民が心をそろへて、學問をさかんにし、ぎじゆつをみがくここに努力をつづけて來たので、わづかな間に今日の

やうな世界で一二を争ふ大工業國となるここが出来たのである。

十九 あへん戦争

英國は、インドをすっかり自分のりやう地としてしまふと、こんどはシンガポールをこつて、ここを東亞しんりやくのねじろこしました。

このシンガポールのずっと北の方には、古い歴史をもつてゐる支那があります。

支那には、西洋人のほしがつてゐる茶、絹などがたくさんあります。英國人はこれに目をつけました。しかしこれらのものを買ふには、たくさんのお金をはらなければなりません。そこで、金をはらふかほりに、インドで出来るあへんを賣りこもうとしました。

そのころ支那では、あへんが人間のからだにがいがあるので、その輸入をきんじてゐました。しかし英國人は、いろいろなずるい方法をこつて、ごんごんあへんを賣りこみました。

支那に賣りこまれるあへんは、だんだんふえて來ました。そして英國人のまうけた金は、たいへんな高になりましたが、あへんをのむ悪いしふくわんは、支那にすっかりひろがつてしま

ひました。支那の人々は、あへんのためにからだがよわくなり
仕事もしないでぶらぶらしてゐるものが多くなつて來ました。
このまま行けば、支那はほろびるより外しかたがありません。
支那の政府は、それをたいへん心配して、あへんのはいつて
來るのを防がうと、色々苦心をしました。しかしなかなかうま
く行きません。そこで政府も、がまんができなくなつて、

「ごんなことが起らうとも、あへんは國に入れまい。」
と、かたく決心をしました。

せいで千八百三十九年、りんそくじよは、政府の命令を受
けて、かんさんに行きました。さうして英國のしやうにんに、

「あへんを持ってゐるものは、すぐひきわたせ。」

と命じました。

この時集つたあへんは、
二萬箱もありました。りん
そくじよは、強い決心を英
國人に見せるために、その
あへんを港につみあげ、火
をつけて焼いてしまひまし
た。

英國はたいへん怒つて、



「焼いたあへんの代金をかへせ。」
「でうやくをあらためろ。」

なごご、自分かつてなごごを申しこんで来ました。

しかし、こんな申しこみを、政府がきくはずはありません。
さうさう、兩國の間に戦争が起りました。

戦争は四年間もつづきました。かんごん、しゃんはいをはじめ、支那の中部南部のおもだったまちは、英國軍にせんりやうされてしまひました。戦争は全く支那のまけでした。

支那はしかたなく英國ごなんきんでうやくをむすびました
このでうやくで、英國は支那からあへんの代金を取り、しや

んはいをはじめ、五つの港をひちかせました。その上、ほんこ
んをさつて、しんりやくのねじろをまた東に進めました。

このやうにして、自分だけさかえようとする英國人の悪い心
を東洋の人たちは、ながくわすれないでせう。

二十 軍神加藤少將

今日、私は日本語學校で、かう
くう隊の方から、軍神加藤少將に
ついて、次のやうなお話を聞きま
した。



今日は五月二十二日です。軍神加藤少将がアキャブの沖ではなばなく戦死された日です。今思ひ出して見ても、少将はまことにりっぱな方でした。

少将がマライからビルマにうつって來られたところのここで、加藤部隊はつばさをそろへて敵飛行場のこうげきに向かひました。敵飛行場の上空に來て見るこゝまひ上つて來る敵機はありません。そこで部隊は、地上のこうげきをはじめました。ところがこの時、高い空の雲の上にかくれてゐたたくさんの敵機が、ふいに、ま上からこうげきして來ました。上方にある敵と戦ふことは、なかなかむづかしいものです。それでも、加

藤部隊は敵中につつこんで、いさましく戦つてかへつて來ました。

マライ、スマトラで、今まで加藤部隊の相手にしてゐたものは、主にハリケーンやスピットファイヤーといふ飛行機でした。こんど戦つた相手は、トマホークといふあらででした。

この戦ひで、加藤少将ほどの人が、いつものやうに敵機をうちおさすことが出來なかつたといふことを聞くこゝ、人々のうちには、

「トマホークといふのは、すごい飛行機かもしれないぞ。」
なごご考へるものも出て來ました。

少將は、

「若し本當に日本の飛行機が、敵の飛行機に劣つてゐるならたいへんである。これは一つ十分にためして見なければならぬ。」

と考へました。

四五日たつてから、少將はりつばなうでまへを持つてゐる部下を選んで、七機で敵飛行場のこうげきに向かひました。

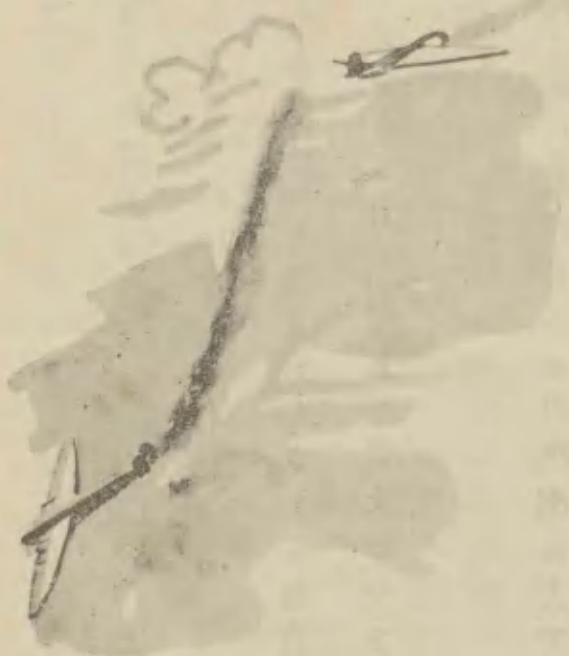
飛行場の上に来ると、敵機が後から後からこまひ上つて來ます。これを上方からこうげきしては、兩方の飛行機をくらへるここが出来ません。加藤少將は、上空を飛びながら、敵の上つて

來るのをまつてゐました。間もなく、敵はこちらと同じ高さになりました。飛行機は前と同じトマホークで、しかも十四機です。

「これはつがふがいい。」

少將は飛行機をつばさをふりながら、まっさきに敵の中につっこみました。

はげしい空中戦ののち、敵機八機をうちおとし、二機をふじちやくさせて、味方はみんな元氣で、ゆうゆうきちへ



かへって來ました。

この事があってら、日本機のすぐれてゐることが、はつきりわかり、空の勇士のいきは、一そうさかんになりました。

少將は、このやうに勇氣もあり、けんきゆう心もさかんな方でありましたが、また部下をひきゐる力と、部下を愛するやさしい心を持ってをられました。

加藤少將こそ、本當に軍神と申しあげることの出来る方です。少將はよく、

「自分は、命のある限り戦ふつもりだ。そして多くの部下が死んでゐるこの南方の土に、ほねをうづめるかくごである。」

と言つてをられました。

少將は、アキヤブの沖で、單機で敵とたたかひ、これをうちおとしたのち、ごうごう自分も波青きベンガル灣わん上に、花ご散つて行かれました。

天皇陛下の御ため、大東亞のためにはたらいた一生を考へて、きつご、まんぞくしてをられることでせう。

お話はこれで終りになりました。私たちはふかくふかく感げきしました。

私たちは、ビルマをりっぱにつくりあげて、少將をはじめ、こんごの戦争になくなられた方々に、おれいをしなければな

らないさ、つくづく思ひました。

二十一 秋

ちんちろ松虫

虫のこゑ、

庭の畠で

なきました。



ぎんぎら、葉のつゆ

草のつゆ。

月の光が

ぬれました。

ごろごろもえる火

あろりの火。

くりがはぜます

にほひます。



二十二 兵えいだより

モンフラニユン君、お手紙ありがたう。をちさんやをばさんも、おかはりないさうで何よりです。

ぼくも、ビルマ国防軍にはいつてから、ずっと元気です。はじめはよく、こきやうのころなご思ひ出されてこまりましたが、このころは、すっかり兵えい生活になれて、毎日、楽しい日を送つてゐます。

朝、きしやうらつばがなるご、いっせいにはね起きます。すばやくねごこをかたづけて、かわいた手ぬぐひで、からだか赤くなるまでこすります。それから、兵しやの前に並んで、てんこをうけるのです。てんこがすむご「一、二、三、四」ごかけ聲勇ましくたいさうをしますが、その時は何ごもいへないよい氣持です。

けうれんは、午前ご午後にあります。「氣をつけ」のしせいを正しくしたり、大きな目を見はってくわつばつにけいれいをしたり、銃をかたにほてうを合はせて、勇ましく行進したり、小銃をうつけいこをしたりします。

時には朝早くから、遠くへえんしふに出かけるごごもあります。森や林の中をかけまはつて、「バンバン、バン」ご小銃や

きくわん銃をうったり、相手のちんちに「わあつ」と大聲をあげて、はげしくごつげきしたりします。このやうに野原や山を一日中かけまはして、夕方おなかをべこべこにして、なつかしい兵えいへ歸って來るのです。歸るときすぐ兵器の手入れをして夕飯をたべますが、そのおいしいことは、かくべつです。

夕食後は、ぼくらの一番楽しい時間で、軍歌のれんしふをしたり、しうきうをしたりします。またお茶をのみながら、お國じまんの話に花をさかせることもあります。

二十二時半には、めいめいの部屋で夜のでんこがあります。ぼくたちは「今日もおかげで無事に終りました。」といふ心持で元氣よく番がうをかけます。

二十三時半には、消燈せうとうラッパが鳴るので、それまでに、日記をつけたり、手紙をかいたりします。

兵えいは大きな家庭で、中隊長ごのをはじめ、上官の方々がぼくらを自分の弟か子供のやうにしんせつにして下さいます。それで、みんなはなかよくはげまし合って、このビルマをまもるために、また大東亞戦争をかちぬくために、りっぱな軍人にならうとつとめてゐます。

この手紙といっしょに、しゃしんをお送りいたします。ぼくの右に居るのが、ごなり村のモンテン君です。ごうです。

この軍服すがたを見て、リっぱになつたごお思ひになりませんか。

モンフラニユン君も、來年はぜひビルマ國軍にはいつて來ていただきたいと思ひます。

ちき消燈ラツバがなりますから、これでやめます。みなさんによろしく。

さやうなら。

五月一日

キンモンヂー

モンブラニユン君

二十三 シュエダゴンベヤ

昔、ウカヲバの國に、タゴッサミバリカといふ二人の兄弟がゐました。インドがききんでこまつてゐるといふ話を聞いたので、兄弟は米をつみこんで、海をわたつてはるばるこインドに行きました。

ちやうごその頃、インドのブダガヤには、おしやか様がおいでになつて、ほだいじゆの下で、教をこいてゐらっしゃいました。

兄弟は、おしやか様をおたづねして、色々ありがたいお教を

聞きました。さうしておしやか様に、めづらしいはらみつのおくわしをくやうしました。おしやか様はたいへん喜ばれて、

「おまへの國のシングッタラといふ山には、前世ぜんせの佛たち三人のかたみがまつつてあるはずです。どうか此のかみの毛を、その佛たちのかたみといっしょにうづめて下さい。」

ご申されて、兄弟に御自分のかみの毛を、おわたしになりました。かみの毛は八本ありました。

兄弟はそのたふさいかみの毛をおしいたいて、別れををしながら、こきやうに歸ることになりました。

ベンガル灣の波は、靜かでした。船は東へ東へと歸りを急ぎました。

いく日かの後、船はアジエッタの港につきました。その王は、そのかみの毛をたいへんほしがりました。さうして兄弟がこころわるのもかまはず、王はむりにその中から二本をこつてしまひました。

アジエッタをたつて、タヤナ山の沖に来ると、ふもこにすんである海へびの王が、またまた、二本のかみの毛をぬすみ取りました。

兄弟はたびかさなるさいなんにかなしみながら、やうやく、ウカラバの國に歸りました。

ウカラバの王様は、兄弟の話を聞いて、さっそく、りつばな
お祭をするやうに、けらいに命じました。町の人々も、村の人
々も、このありがたいおしやか様のかみの毛ををがまうご、大
ぜい集って來ました。

王様は美しくかざった象にのつて、たくさんの兵隊をひきつ
れて、おまゐりをしました。象からおりた王様が、一心におい
のりをしてゐるご、ふしぎや、ぬすまれたかみの毛は、もこの
通りにかへつて來たではありませんか。

いよいよシングッタラの山に、かみの毛をおをさめする日が
來ました。山の上には美しい雲がたなびき、タヂャミン様も、
たくさんのナッツをひきつれて、天上からくだつておいでに
なりました。

ナッツたちが、山のいただ
きに穴をほりました。その穴
には美しいはう石がまかれ、
その中におしやかさまのかみ
の毛ををさめた
金の箱がおかれ
ました。

かうして、



おしやか様のかみの毛は、ながくながく、シングッタラの山にまつられたのであります。

それから、その穴の上に金のペヤーがたてられ、金のペヤーの上には銀のペヤーがたてられ、銀のペヤーの上には、すす、ごう、なまり、てつ、ねん土なごのペヤーで、上へ上へこつつまれました。

さいごのペヤーが出来上ったのは、十二月の美しい満月の夜でありました。この夜はタバウンの満月祭さいといって、今でも、さかんなお祝が行はれます。

この後、三百年の年月がすぎりました。このペヤーを造ったウカラバ王朝もほろび、いつからごもなく、おまゐりする人もなくなりしました。風に吹かれ、雨にうたれて、ペヤーもくづれ、シングッタラの山は、昔のやうに林でおほはれてしまひました。

そのペヤーをふたたびきついたのは、今から二千三百年ほど前、ベグーのブンナリカ王だといはれてゐます。王様はこの山のふもこの町をアラマナと名づけました。

アラマナの町は、その後ダゴンとあらためられ、ダゴンが後にヤンゴシとになりました。

シュエダゴンペヤーもその後、代々の王様のほねをりによつ

賣 (34)	絹 (31)	不 (29)	育 (25)	並 (21)	住 (13)	虫 (11)	麥 (10)	勇 (8)	引 (2)
羽 (34)	羊 (31)	故 (29)	富 (26)	社 (21)	馬 (15)	波 (11)	取 (10)	季 (8)	原 (2)
教 (35)	毛 (31)	倉 (29)	細 (26)	祖 (21)	言 (14)	始 (11)	仕 (10)	春 (8)	界 (3)
感 (36)	麻 (31)	回 (29)	産 (28)	頭 (21)	親 (15)	畠 (12)	事 (10)	秋 (8)	孫 (3)
願 (36)	番 (32)	質 (30)	業 (28)	浹 (23)	眠 (15)	皆 (12)	降 (10)	冬 (8)	治 (3)
度 (38)	丈 (32)	通 (30)	最 (28)	別 (23)	砂 (17)	流 (12)	暑 (10)	寒 (9)	御 (4)
筭 (39)	安 (32)	林 (30)	滿 (28)	晝 (23)	顔 (18)	祭 (12)	鳴 (10)	草 (9)	受 (4)
弓 (39)	縣 (32)	港 (30)	洲 (28)	悲 (24)	市 (19)	晚 (12)	家 (10)	綠 (9)	様 (4)
矢 (39)	殘 (32)	切 (31)	稻 (28)	油 (24)	橋 (20)	落 (12)	集 (10)	芽 (9)	間 (7)
持 (39)	都 (33)	綿 (31)	支 (28)	屋 (25)	渡 (20)	元 (13)	終 (11)	吹 (9)	相 (7)
匹 (39)	綸 (33)	衣 (31)	那 (28)	讀 (25)	兩 (20)	體 (15)	強 (11)	樂 (9)	急 (7)
糸 (39)	參 (33)	類 (31)	萬 (29)	苗 (25)	拜 (21)	兎 (13)	作 (11)	頃 (10)	壘 (8)

てだんだんさ美しく大きくなって行きました。
さうしてふたたび、たくさんな人々がおまゐりをするやう
になりました。

選 (92)	限 (94)	單 (95)	散 (95)	銃 (99)	歸 (100)	器 (100)	服 (102)	象 (106)	穴 (107)	銀 (108)	造 (109)
歴 (84)	史 (84)	法 (85)	政 (86)	府 (86)	配 (86)	箱 (87)	燒 (87)	怒 (87)	加 (89)	藤 (89)	劣 (92)
重 (82)	艦 (82)	汽 (83)	飛 (83)	機 (83)	煙 (83)	械 (83)	藥 (83)	品 (83)	製 (83)	努 (83)	古 (84)
庭 (73)	折 (74)	派 (77)	勢 (78)	追 (78)	志 (79)	孝 (79)	身 (80)	指 (82)	電 (82)	炭 (82)	州 (82)
江 (69)	起 (69)	着 (70)	好 (71)	全 (71)	槍 (71)	忠 (72)	義 (72)	姉 (72)	靜 (72)	飯 (73)	昨 (73)
防 (63)	式 (64)	節 (64)	或 (65)	部 (65)	河 (65)	食 (65)	肉 (66)	坊 (67)	乃 (68)	武 (69)	十 (69)
由 (57)	平 (57)	苦 (57)	笛 (58)	宮 (59)	森 (59)	遠 (60)	惡 (60)	居 (60)	隊 (61)	阪 (61)	將 (62)
逃 (40)	返 (41)	泣 (42)	井 (44)	聲 (54)	決 (55)	活 (55)	似 (55)	獨 (56)	英 (56)	勝 (57)	物 (57)

正誤表

一	もくろくシユエジゴンペヤ	正	シユエダゴンペヤ
二	十二頁六行目 お祭りです		お祭りです
三	十九頁二行目 内宮 外宮		内宮 外宮
四	二十一頁四行目 かつら木		かつら木
五	九十四頁二行目 あつてら		あつてから

不卷四 (非賣品)

書編纂委員會

育衛生省

版印刷所

選 (92)	歷 (84)	重 (82)	庭 (73)	江 (69)	防 (63)	由 (57)	逃 (40)
限 (94)	史 (84)	繼 (82)	折 (74)	起 (69)	式 (64)	平 (57)	返 (41)
單 (95)	法 (85)	汽 (83)	派 (77)	着 (70)	節 (64)	著 (57)	泣 (42)
散 (95)	政 (86)	飛 (83)	勢 (78)	好 (71)	或 (65)	笛 (58)	井 (44)
銃 (99)	府 (86)	機 (83)	追 (78)	全 (71)	部 (65)	宮 (59)	聲 (54)
歸 (100)	配 (86)	煙 (83)	志 (79)	槍 (71)	河 (65)	森 (59)	決 (55)
器 (100)	箱 (87)	械 (83)	孝 (79)	忠 (72)	食 (65)	遠 (60)	活 (53)
服 (102)	燒 (87)	藥 (83)	身 (80)	義 (72)	肉 (66)	惡 (60)	似 (55)
象 (106)	怒 (87)	品 (83)	指 (82)	姉 (72)	坊 (67)	居 (60)	獨 (56)
穴 (107)	加 (89)	製 (83)	電 (82)	靜 (72)	乃 (68)	隊 (61)	英 (56)
銀 (108)	藤 (89)	努 (83)	炭 (82)	飯 (73)	武 (69)	阪 (61)	勝 (57)
造 (109)	劣 (92)	古 (84)	州 (82)	昨 (73)	十 (69)	將 (62)	物 (57)

昭和十九年十月二十日印刷
昭和十九年十月三十日發行

日本語讀本 卷四

(非賣品)

編纂者

緬甸日本語教科書編纂委員會

發行者

「ビルマ」國教育衛生省

蘭 頁 市

印刷所

株式會社 光村原色版印刷所

日本語
育振會
藏書之印